

第9回 日本生態学会 公開講演会

『地球温暖化で日本の生態系は
どのように変わりつつあるか』

2006年3月26日(日) 2:00PM~5:00PM

朱鷺メッセ マリンホール(国際会議場)

新潟市万代島6番1号 <http://www.tokimesse.com/>

入場無料

会場案内図

コメンテーター／鷺谷いづみ

(東京大学, 日本生態学会前会長)

司会者／三浦慎悟

(新潟大学, 第53回日本生態学会大会会長)

工藤 岳

(北海道大学)

温暖化により生物間の関係はどのように変わるか？

～高山・北方生態系からの予測～

林 陽生

(筑波大学)

温暖化は農林漁業にどのような影響を及ぼすか？

～最新の研究成果と今後の課題～

高橋 潔

(国立環境研究所)

‘危険な水準の温暖化’はいかにして回避することが可能か？

～京都議定書第一約束期間以降の目標設定と温暖化影響研究～

主催：日本生態学会 企画：日本生態学会公開講演会検討委員会

後援：新潟市 平成17年度 科学研究費補助金研究成果公開促進費補助事業



■バス：JR新潟駅から10分
(新潟駅万代口バスターミナル6番線・新潟交通17系統
佐渡汽船連絡「朱鷺メッセ」停留所下車)

■タクシー：JR新潟駅から5分

■徒歩：JR新潟駅から20分

【問い合わせ】 第53回日本生態学会大会 実行委員会 TEL 025-262-6625 (新潟大学農学部 紙谷智彦)

第53回日本生態学会大会HPアドレス：<http://www.esj.ne.jp/meeting/53/index.php>

講演者プロフィール&講演要旨

工藤 岳 (くどうがく)



北海道大学大学院環境科学研究科博士課程修了。博士(環境科学)。科学技術特別研究員を経て、現在、北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授。専門は生態学。高山植物や森林植物を対象に繁殖特性の進化や花粉媒介昆虫との生物間相互作用について研究している。

温暖化により生物間の関係はどのように変わるか？

—高山・北方生態系からの予測—

季節性の明瞭な生態系では、地球温暖化は気温上昇だけでなく、生物の季節性にも影響を及ぼす。生育スケジュールの変化は、生物間の関係をも変えてしまう。花と花粉を運ぶ昆虫との関係はよく知られた共生関係であるが、温暖化によって開花と昆虫の季節的同調性が変化すると、これまで培われてきた共生関係は崩壊する。温暖化による影響を受けやすいのは、シーズン初期に開花する冷温帯林床性春植物や、短い夏に一斉に開花する高山植物である。温暖化により雪解けが早まると春植物の開花は促進されるが、昆虫の出現時期も同調して変化しないと結実はうまくいかない。また、温暖化によって高山植物の開花が早まるとシーズン初期に霜害の危険性が增大する。また、雪解けが急速に進むことにより地域全体の開花期間は短くなり、花を利用する昆虫の動態を変化させるかも知れない。地球環境変化による生物間相互作用の影響について、花と昆虫の関係を中心に紹介する。

林 陽生 (はやしやうせい)



法政大学大学院修了。理学博士。筑波大学助手。農林水産省四国農業試験場生産環境部研究室長、独立行政法人農業環境技術研究所地球環境部長を経て、現在、筑波大学生命環境科学研究科地球環境科学専攻教授。研究テーマ：地球温暖化の農業への影響、地表面のエネルギー収支。

温暖化は農林漁業にどのような影響を及ぼすか？

—最新の研究成果と今後の課題—

地球温暖化はさまざまな生態系に影響を及ぼすことが明らかである。農林水産業に関わる生態系も大きな影響を受けることが懸念される。食料を供給する源としての生態系を考えると、依然として増加傾向にある人口や農業の場合においては土地利用の変化など、多様な要素を考慮したうえでの影響評価が必要である。

本シンポジウムは日本に焦点を当てるが、幸い東アジア地域の主穀であるコメに関しては、温暖化の影響評価の基礎となる研究の蓄積が多い。また森林面積が多くかつ周囲を海洋に囲まれており、林業への影響や漁業資源の変動などに関する研究が進んでいる。本報告では、これまでに行ったコメ生産への影響について示し、農林水産省が進めている農業・林業・水産業を包括するプロジェクト研究の一部を紹介する。

高橋 潔 (たかはしきよし)



京都大学工学部衛生工学科卒。工学博士。1996年より国立環境研究所にて勤務。現在、同研究所環境計画研究室主任研究員。全球・アジア地域を対象とした温暖化の影響・対策評価のための統合評価モデル(AEM)の開発プロジェクトに参画し、影響評価手法の開発に従事。

‘危険な水準の温暖化’はいかにして回避することが可能か？

—京都議定書第一約束期間以降の目標設定と温暖化影響研究—

京都議定書の発効・目標達成は、気候安定化に向けた長く続く排出削減の道のりの第一歩としてその重要性が大きい。しかしながら、議定書が定めるのは2012年までの先進国の排出量であり、それ以降の継続的な削減努力なくしては気候安定化の達成は不可能である。そのため、国際交渉の最前線では、2013年以降の気候変化対策をいかなる枠組みで行っていくべきかについて、温暖化影響・適応策の評価研究の知見もふまえて、活発な議論が繰り広げられている。生態系への影響は人為的な適応策による被害軽減が困難であり、わずかな気候変化であっても深刻な被害が生じうるため将来枠組みの議論でも重要な意味を持っている。講演では、最近の国内外の影響研究の知見を紹介しつつ、気候安定化・危険な水準の温暖化の回避のために、影響研究が求められる役割について、演者の考えを示す。

司会者プロフィール



三浦慎悟 (みうらしんご)

東京農工大学大学院修士課程修了。理学博士(京都大学)。兵庫医科大学、森林総合研究所を経て、現在、新潟大学農学部教授。専門は野生動物生態学。暖冬による死亡率の低下がシカ個体群の増加に及ぼす影響を分析中。

コメンテータープロフィール



鷲谷いづみ (わたにいづみ)

東京大学大学院理学系研究科修了。理学博士。筑波大学講師、助教授を経て2000年1月1日より東京大学大学院農学生命科学研究科教授。専門は生態学、保全生態学(植物の生活史の進化、植物と昆虫の生物間相互作用、生物多様性保全および生態系修復のための生態学的研究など)。